

月色の彼岸花

鮭太

森の木々が生い茂るあぜ道の様に踏み鳴らされた獸道辺りがやたらと明るい。いくつもの血の様な光がいくつもの車の上から回転するように周囲に放たれている。海や空の様な色の服と夜空の様な帽子を被った人間たちと目を刺す血の色の光のせいか、僕の胸はやたらと振動していく、耳の先から尻尾の先の毛までピリピリとしている。更には僕を胸に抱くカイの胸もバクバクと動いているだけでなく、体全体から小刻みに震えていた。

僕たちはその獸道の真ん中で、柑橘類のような色と闇色で彩られた帯が張られているその道の奥の、不穏な雰囲気の空色の幕をじっと見つめていた。

あれだけ雲のなかつた夜空は、いつの間にか僕の体と同じ色の雲に覆われていて、更には湿気のある空気が山から流れてきて、僕の両頬の鬚を大きく揺らした。

生まれて初めて僕は車というものに乗った。車という生き物は見たことはある。しかしそれは人間たちが乗っているところを窓から眺めているだけだったので、今回乗ることになると悟った時、僕の心は好奇心に満たされた。車というものは客観的に考えてとてもいいものだ。何故なら楽に移動できるからだ。人間は二つの足で歩いているが、車に乗れば何もせずに移動できる。しかもとても速い。僕が全力で走っても多分追いつけそうにない。しかし、いざ乗つてみるとなると、なんともまあ乗り心地の悪い事かとイライラした。ガタガタと搖れるしゅるさい。しかもとても窮屈だ。僕の飼い主のカイは僕を網の窓の付いた箱の中に閉じ込めたのだ。僕は針金のように固まつた自慢の尻尾を股から顔の方に伸ばしてなだめるようになだめる。その男性はそういうえべと言う感じで口を開いた。

そんなストレスを感じている僕なぞお構いなしに、カイは車の前の左のところに座り、右に座っている男性と楽しく談笑をしている。その男性は明らかにカイよりも年老いている。カイは黒い短い髪だったが、その人物のものは白い毛が混じっている。カイの肌はときどき僕の肌のように短い毛をはやしてはいるものの、なめらかな肌ではあるが、その男性のものは彫が深くでこぼこしていて、まるで干からびた泥の池の底のように干からびている。しながらカイよりもどこか元気で朗らかな印象であるのと、どこかカイと雰囲気が似ている。その男性はそういうえべと言う感じで口を開いた。

『お前全く帰つてこなかつたからこんな話したことなかつたけど、都会の生活はどんな感じだつたんだ？』

カイは唸つてふと考へる。

『どんな感じっていうかなあ。まあ住んでみたら意外と普通かな。便利つちや便利だけどね。コンビに近いいろんな店もあるし。まあ飽きないつてのはある。都會に行くと寂しさが増

すつていろんな先輩とか母さんとかは言つてたけど、全然そんなことなかつたなあ。まあ、寂しいっていう点ではこいつが居たのもあるかもだけね』

カイは首だけで振り返つて、後ろの列の真ん中にある箱の中の僕を柔らかい表情で見る。同じように男性も一瞬だけチラリと僕の方を見て前を向き直して言う。

『ああ、こいつか。名前何だっけ』

『クロ』

男性はカイの言葉に呆れたように言う。

『またテキトーな名前を付けたなあ……』

その言葉に苦笑いの声がカイの口から零れた。

『いや、捻つて捻つて考えたけど、一周回つてシンプルが一番いいんじやね？ ってなつた』

変わらず呆れて男性は『ああそうかい』と言つた後、

『しかしまあ、見れば見るほどユウに似てるなあ。色だけじゃなく何ていうか、顔つき？ みたいなやつ』

『猫の顔とか見分けつかねえだろ』

カイはふふっと笑つて返して言う。

『でもまあ俺も拾つたとき、何となくユウの生まれ変わりかもって思つたよ。丁度俺のアパート、なんかペツトOKだつたから、これは飼う運命だろつ、って思つたんだよなあ』

そんな感じで二人は会話を続けている。僕には人の言葉が分からないので、何の話をしているのかは僕にはわからないが、それとなく楽しそうにしているのは分かる。

そう話を聞いているうちに、なんだか眠くなつてきてしまつた。この揺れにだんだんとしんどくなつてきた。僕のまぶたは物に布をかぶせるようにやんわりと閉じていつた。

物音が激しくなつたのでふと目を開けると、カイと男は車から降りていて、車の側面をパツクリと開けて荷物を下ろしていた。僕の入つている箱も同じように車から取り出され、カイにその箱の網の窓を開けてもらつた。開けてもらうや否や僕はカイの腕の中に飛びつく。そんな僕を見てカイはにっこりと笑い、頭の先から尻尾の先まで毛をつくろうように何度もなでる。そのカイからの施しに甘えつつ、車の方を見て言う。

『ご苦労』

しかし車は何も言わず、というか最初から聞くような素振りすら見せない。何度か言つても何の反応も見られない。礼儀を知らない生き物だなあと僕は鼻を鳴らす。折角立派で大きな体と短いながらも風のように早い足があつても、礼儀をわきまえないというのは残念な生き物だ。

こんな礼儀知らずなぞ気にしていくても仕方がないと、僕は辺りを見回す。そこは何とか、初めて見る景色だつた。周りどこを見ても自然というものが目に入る。様々な形の草や様々な色の花、大きくそびえ立つ木々があつた。都會というところではこんな景色はなかつた。窓から見ることの出来る景色は、ずっと石と同じ色の世界だつた。人間がたくさんいて、

車もたくさん走っていて、大きく背の高い石の建物が無数にあった。ここには僕らを除いて、人も車もなく、目立った高い石の建物もない。あるとすれば、人の代わりに空を飛ぶ鳥や木の葉のような虫、地を這つたりしている虫などで、建物のようなものと言えば、細い石の塔がいくつか地面から生え、いくつかの黒い糸で互いに繋がれているものくらいだった。こんなのが初めてだと僕は尻尾をばたつかせる。

そんな景色の中、明らかに人の家と思われる建物があった。都会にはなかつた、大部分が木で出来ていて、屋根の部分に小さな板状の石がいくつも重ねられているというものだ。木の壁は雨風にさらされてすっかり黒く変色してしたり、窓もいくつかくすんでいたりと、傷んでいる様子が見られるが、言葉では説明できないが暖かさというか、癒しがその家からは感じられる。

それからあの男性は、その建物の正面にあつた引き戸を開けて何やら大声で何か言っている。それを受けた男の子と女の子、それからまだ若さがあるが顔に少しのしわを帯びた女性と、さらに老け込んだ老女が出てきた。男の子は活発さがうかがえるような雰囲気を持っていて、短い髪とレモンの色の袖の短い服が印象的だ。女の子は対照的に静かな印象で、長い夜空の色の髪にさくらんぼのような髪留めを付けていて、ワンピースとかいうものを着ている。まだ若さを感じる女性は何となく包容力を感じる見た目で、同じく夜空の色の長い髪を右肩へと流すように結つており、桜の花びらのような色のエプロンというものを着ている。最後に老女は、しわが刻み込まれた顔だが、古い大樹のような安心感がある。髪は夜空の色と灰の色が混ざったような色でふわふわと巻き癖が付いている。

その四人は車の方とカイと僕を見て寄つて来る。その中でも男の子は僕の方を獲物を定めた鷹のように見つめ、カイの腕の中の僕に飛びかかってきた。

『兄ちゃん!! 猫!!』

と男の子は叫び、カイにすり寄る。殺気に近い何かを僕は瞬時に感じ、カイの腕から飛び降りて男の子を睨むが、お構いなしに男の子は僕を捕まえようと全力疾走する。僕は心臓を恐怖で高鳴らせて素早く避け、目についた獸道を駆けていった。

ずいぶんと恐怖に身を任せ全効で走つた。後ろからは何も追つてくる様子はない。ほつと胸をなでおろして足を止めた。狭い部屋の中でのみ今まで暮らしてきたので、このように全力疾走するのは滅多にない。だからか、体から疲労が溢れて零れ出るかのようで、その証拠に吐く息も沸騰した湯の湯気のように熱い。出来る事なら地面に寝転がりたかったが、土の上に寝転がる経験が今までなかつたので、何だか気が引けた。

そこでふと踵を返す。このまま戻ろうかと思ったが、あの追いかけってきた男の子が頭をよぎり、戻ろうとした足を止めさせられる。どうしようかと、太陽の照る道の上で僕は考えた。

何となく帰つた方がいい気がする。しかしあの男の子のせいであまり気が乗らない。

家とは逆の方向をまた見る。遠くにはぼんやりと何かがそびえたつてている。こういう時、なんとなく義務から解き放たれたいという欲求が沸いてしまう。そんなことをぼんやり考えていると、ふと頭上を何かが飛んでいく。細長い胴体に木の葉の様な羽、確かあれは蝶々というのだ。風に煽られ、不器用に霞のように揺らめきつつそれは飛んでいた。唐突に現れた蝶々だが、僕の興味を引くのには十分すぎる存在だ。何せ僕は本物をガラス越しには見たことはあるが、頑張れば手が届きそうなところにいるのは見たことがない。気が付けば僕は我を忘れて、風に舞う蝶を追つて、田舎の道を流浪していった。

散々僕をもてあそんだ後、その蝶はまるで風船のように空へ空へと高く飛んで行った。僕は飛び跳ねるのを止め、物惜し気によく蝶を見つづ、蝶が遠く小さな粒になつて消えるまでじつと目を離さずに体の動きを止めていた。僕がその蝶を追いかけでは飛びつき、追いかけては飛びつき繰り返しているうちに、いつの間にか僕はまた見知らぬ風景の中にいた。綺麗に作られた石の塀があつて、その塀の中から古い家と植木が顔を覗かせている、というのが至る所で見られる。体感的には長い時間追いかけていた気がするので、かなり遠い所まで来てしまつていると考えられる。

流石にそろそろ帰つた方がいいだろうという気持ちが浮かんできて、歩いてきた道の方へと歩き出す。幸いにも家への方向は見失つておらず、だいたいこの道を通れば帰れるだろうという目算もある。今ならまだ労せずに帰れるだろう。カイをあまり心配させてはいけない。

そんな心持で数歩僕が踏み出す。と、唐突に近くに何かの気配を感じた。

「見ない顔だな」

落ち着いた雄の声が聞こえた。声のした方、僕から見て右の塀の上を見ると、ぶつくりと太つた狸のような老いた猫がいた。一瞬、本当に狸かと思ったが、雲の色の毛並みの中に、栗の色のぶちがあつたので、何とか猫と判別することが出来た。その猫の毛並みはどこかやさぐれていてはいるものの、脂肪で垂れ下がつた顔を見るに、危ないような雰囲気は一切なく、どこか親しみやすい雰囲気を感じる。

唐突なその猫の出現に、僕は虚を突かれていたので、黙つたまま会釈をした。するとその猫は塀から飛び降りて、僕の近くへと寄ってきて言う。

「新入りだね？ どこから来たんだい？」

「戸惑いつつも、僕は返す。

「えと……東京つてどこから……」

その猫は「ほう」と小さな驚きの声を漏らした。

「都会じやないか。都會猫が随分と遠いところまで來たもんだ。飼い主に捨てられたのか？」

「いや、捨てられ——」

「じいさん!! ジいさん!!」

と、突然僕の声を遮るように、自分と同じくらいの年の若い猫の声が聞こえた。声のしたのはさつき老いた猫が声をかけて辺りからで、僕は咄嗟にそこを見ると、一秒も待たずに若い雄猫が現れた。その雄猫と僕との視線がぶつかると、雄猫は「おおっ」と声を上げて一瞬驚きでたじろいだ。恐らく僕も同じ反応をしているだろう。その猫が塀から飛び降りると、陽気に話しかけてきた。

「おおなんだなんだ、新入りさんか!! 爺さんのにおいといい匂いがしたから、てっきりじいさんが女でも口説いてんのかと思つたぜ。あんた飼い猫か?」

「え、そうだけど、よく分かつたね」

その猫は得意げに笑つて言う。

「まあな!! まあ、ネタをばらすと、飼い猫とか昔飼っていた猫はいい匂いがするもんさ。人間に飼われると風呂に入れられたりするだろ? 石鹼のにおいがなんとなくするんだ」言われた瞬間に僕は無意識に自分の前足の匂いを嗅いだ。しかし、石鹼のにおいと言われても何だかよく分からぬ。僕の不満気な顔を見てか、その若い猫は言う。

「長く飼われていると鼻が馬鹿になつてくるんだ。多分、家の中ににおいのするものがいっぱいあるからだろうな」

「へえ」と、僕は素直に感心の声を漏らす。続けてその猫は言う。

「数日外でうろうろしてたら鼻が良くなつてくるぜー。実は俺、昔はちよつとした家の中で飼われてたけど、捨てられて数日でちやんと匂いを嗅げるようになつたしなー。ここに引っ越していくんならすぐ出来るようになるさ。これからよろしくなー」

と、氣さく僕に言つてくれたが、僕はそこで「あ、いや」と少し首を下げて言う。「ん?」

という顔で、目の前の二匹の猫がわずかに目を見開いた。

「引つ越しじゃないんだ。カイが実家に少しの間だけ帰るから、僕もついてきたんだ」委縮したような声でそう言うが、ふと顔を見上げてみると、二匹は全く動じないどころか、「それがどうしたんだ」という表情を見せる。老いた猫はそれに返して言う。

「気にしなくてもいい。野良にとつては毎日が最後の別れみたいなもんだ。そんなもんだから、その場あわせでわしらは仲良くやつとるよ」

続いて若い方の猫が言う。

「その……カイ? ってのは飼い主の事か?」

すかさずに僕がコクリと頷くと、更に質問を投げかける。

「いつまでいるんだ?」

そう聞かれて、ふと僕は考え込んだ。

「よく分かんないなあ……多分しばらくは居ると思うけど……」

「そつかー……まあ、こつちにいる間だけでもよろしくやろうぜ」

若い猫はそう言つて笑い飛ばす。そこで、はつと思い出すように言う。

「そういうえばお前、名前は何て言うんだ？ ちなみに俺は昔の飼い主から、タクって呼ばれてたぜ」

続いて老いた猫が言う。

「わしはスケロク」

タクにスケロクかあ、と心の中で僕は名前を反芻して、自分の名前を言う。

「カイからはクロって呼ばれてる」

すると「ははっ」とタクが笑った。

「そのまんまだな」

「？ クロってどういう意味なの？」

素で聞いてみた僕だったが、タクは一瞬キヨトンとして、「あああ……」と声を漏らす。

「お前の毛の色の事だよ。その色の事をクロって言うのさ。あと、夜空の色とかな」

僕は自分の体を軽く見回して言う。

「何というか、凄く分かりやすいね」

「だな」

クスリとタクが苦笑いをする。僕もつられて軽く笑い声を漏らした。

「まあ、飼われると色々物を知らない猫になっちまうからなあ。何か知りたいことあつたら俺とかじいさん、他の猫に聞いていくといいさ」

「うん、そうするよ」

そして「そうだ」とタクが思い付くように、

「この後時間あるか？ 軽く案内してやるよ」

そこで僕は首をピクリと動かして大変なことを思い出した。

「あ、そう言えば家に帰らないと。また今度お願ひしてもいいかな？」

「あーそうか、じゃあまた今度な。俺らはだいたいこの辺りが縄張りだから、ここに来てくれるればお前が来たつてにおいでわかる。じゃあ、気をつけて帰れよ」

「うん」

そして僕は来た道の方を改めて見て、

と、そこでスケロクが僕の背中に向かつて言う。

「おい待ちな。お前さんの家はそっちの方か？」

突然の問いかけに僕はまた体を振り向かせて言う。

「え、そうだけど」

スケロクは明らかに顔を曇らせた。タクを見ても難しそうな顔をしている。

「何があるの？」

問を返すと、スケロクはゆっくりと言ふ。

「何かあるかは知らないが、そっちの森の中に変な臭いのするところがある。あまりに変な臭いがするもんだから、わしらはあまり近付かないようしている。何があるかは知らないが、もしかしたら熊か何か出るかもしれないから、気を付けるんだぞ。寄り道はしない方が

いい

「そういうことさ、お前はまだ鼻が良くないから、尚の事気を付けるんだぞ」

タクもそう念押しをしてきた。僕は不安になりながらも、来た道を戻ればいいだけの話だと、少し気に付けようと胸に決めて言う。

「うん。分かった。気を付けるよ」

「おう、じやあな」

タクの別れの挨拶を受けて、僕は歩みを始めていった。

あの家を目指して、住宅地を抜け田んぼ道を抜けて、森に差し掛かる。思えばあの家は他の家に比べて離れた所にぽつんとしている。寂し気であるとも思う反面、自然に囲まれているし、鳥や風のざわめきや虫の声やらでなかなか賑やかかも知れないとも思う。道中、耳を研ぎ澄まして歩いていると感じるが、鳥たちが木の上で泣いている声が歌を歌っているようで、また風に煽られる草木がこすれ合って笑い声のように響いている。加えて空気もおいしい。深呼吸をすると涼しい空気が鼻から喉を通って胸いっぱいに流れ込んでいく様は、まるで喉の中を程よく冷えた水が突き抜けて全身に巡っていくようである。今は鼻があまり利かないとタクが言っていたので、鼻が良くなっていくと、この自然をもっと違った目線で見れると思うと、心が躍るようだ。

そんな朗らかな気持ちでゆっくりと帰路に着いていると、僕は目の前の光景に足を止めた。目の前には人か獣かは分からぬが、生き物が踏み鳴らして草が禿げた道が、二つ股分れしていた。どちらの道だつたであろうかと、僕は目だけで行ったり来たりさせた。

ここを最初に通つた自分の記憶は曖昧なもので、何せ追いかけられていて無我夢中だったのだから、何が何やら道はどうだつたかどんな雰囲気だつたか、というか分かれ道というものがあったのかと今氣付いたくらいだ。

ここまで来ると考えても仕方ないだろう。一度行つてみて間違つた道だと思えば引き返せばいいだろう。

何となく、果てしなく何となくだが、右の方へと僕は歩いていった。

恐らく間違えたらしい。感覚的にだが、明らかに歩いた距離を考えると、もうとうに家に着いてもいい筈だ。景色からもだんだんと森の奥へ向かっているということが分かる。いつの間にやら道は無くなつており、木の葉と枝の絨毯が敷き詰められた道なき道の上を僕は歩いていた。木の背丈も平地の小野に比べて断然と高く、一倍三倍の大きさになつていて、それらの枝は横にも縦にも手を伸ばしており、空を殆ど覆っている・その木々の合間から見

える太陽の光から見て、恐らくもう日が傾きかけている時刻であるという事は察しが付く。これ以上進んでも意味がないのは明白だ。引き返そう。今日だけで何度も繰り返したかは分からぬが、体を後ろの方へと向ける、そんな行動の最中だった。

ふと、森の奥の方に何かがあることに気付いた。それは夜の電灯のように光る何かが、六つ程あった。今までに来た道を帰ろうとしたが、その六つの物体が気になつて仕方がないと、自然と体がその六つの物体の方へと向かつていった。

しばらく進んだところで、その光っている物体は、雪の色の猫たちということが分かつた。その猫たちはそれぞれ別々に木の傍で座つていて、特にどこを見ている訳でもないらしく、まっすぐ前を見ていたり少し上を見ていたり地面を見つめたり、またある者は座りながら体を丸めてうずくまつていて、何ともまあ気ままな様子である。また、威嚇されている訳でも僕の方を見ている訳でもないが、何となく近寄りがたい雰囲気を出しているのと、顔立ちはそれぞれ違うのに、一様に無表情なため、どうも見分けがつかず、だいたい何歳くらいかという程の特徴もつかめず、雄なのか雌なのかの区別すらつかない。

恐る恐る僕は集団に近寄つていく。しかし猫たちは変わらず僕の方を見ず、無表情でただただそこに鎮座しているだけだった。そこで、僕はそのうちの一匹に近寄つていく。その一匹は相も変わらず僕を見ず、無表情だ。僕は思い切つて声をかけた。

「あのー、こんにちは」

流石に反応せざるを得ないと僕は予想していた。しかし、全くの反応はない。

「あの、すみません」

続けて言つても動かない。尻尾一つ動かさない。一瞬人形か何かかと思つたが、それにしつは本物にそつくりだ。それでもここまで反応がないというのは、無視というものを通り越して、気付いていないというほうが合つている。僕はその猫の見つめている方向を見て、わざとその視界の中に入つていった。そしてその猫を見る。間違ひなく目に映つてゐる筈だ。でも、間違ひなく僕を見ていらない。

奇妙と言うかもう最早気持ち悪さを感じて、諦めることにした。そして僕は他の五匹を見回す。それらも相も変わらず各々の行動を続けている。その不思議な光景を見つめていると、何だかこの猫たちと関わるのは、無益なことだと思い、帰ろう、と心の中でつぶやいた。そんな矢先だった。

突然、この猫たちのうちの、体を丸めてうずくまつていた猫が、ゆっくりと顔を上げた。僕は耳を固くとんがらせて、胸を跳ね上げて驚いた。その猫は、他の猫たちとは違い、とても特徴をつかみやすかった。この猫だけ毛がふんわりとしていて、雌猫であり、僕と同じくらいの年齢という事も分かつた。率直に思ったのが、とても美しい、ということだった。雪のような色の羽毛のような毛をそのまま身に付けていて、目の色は深い海の中のような色合いだった。

更にその美しさを上げるように、月色の花が彼女の周りに咲いている。その花々は背丈が高く、無駄に葉っぱで着飾ることをせず、ただその月色の猫の尻尾のようにくねらせた花弁

と猫の髭のような細い花弁を天に向けて咲いて、その様から高貴な雰囲気を感じる。

そして、その猫はあろうことか、他の猫とは違い、僕の方を眼そうな目で見ている。眠気が冴えたのか、その猫は僕をじっと見つめつつも少し驚いた表情をした。

「あのー……こにちは……」

その猫は動搖をすぐに消し、まぶたをゆっくりと少し降ろした。

「こんなところに誰か来るなんてね。何か用かしら」

静かながらも鋭い声だ。耳に直接氷を詰められたような感覚さえ覚える。しかしどこか綺麗で小さな鐘が鳴ったように、澄んでいて真っ直ぐだった。

僕は少し呆気に取られた。が、はっと我を取り戻して言う。

「いや、用つていうか、道に迷っちゃって。たまたまここまで来た感じかな……」

その言葉を、そして僕を品定めするように時間をかけて僕を見る彼女。

「そう……だったら、あっちに行くといいわ」

彼女は顔を右へと向ける。つられて僕も右を向く。背の低い藪があり、一見道などないよう見える。

「あの藪を超えて行つてまつすぐ進むと、神社に出るわ。そこなら道路があるから、そこからならもう迷わないと思う」

僕はここで頭の上にはでなを浮かべて頭を傾げる。やけに反応の薄い僕を見てか、彼女は眉間に少量のしわを作つた。

「……どうかしたの？」

「ジンジヤつて何かなあと……」

彼女は鼻から息を噴き出して言う。

「貴方飼い猫？ それもこの辺りの者じゃないわね？」

「うん、カイの——僕の飼い主の都合で暫くここにいるんだ。クロつて言うんだ。よろしく」無知さを見透かされてか、僕は愛想笑いに似た苦笑いしかできなかつた。

「クロ、ねえ。そのまんまね」

「はは……まあね……。君の名前は何て言うの？」

何気なく聞いたが、彼女はその間に眉のしわを強めた。そしてしばらく間をおいた後、眉押輪を解いて口を開いた。

「佳月(カゲツ)よ」

その名前を聞いて、僕は興味本位に質問を重ねた。

「カゲツってどういう意味なの？」

「……綺麗なお月様つて意味よ。それも、雲一つない空に、電灯みたいに綺麗に光つているときの月の事を指して言うわ」

「へえ……よくそんなの知つてるね……」

彼女はそっぽを向いて言う。

「……自分の名前の由来くらい知つてて普通じゃないかしら。それより、行かなくていい

の？」

あつと僕は声を出す。そうだつた、帰らないと。

「道教えてくれてありがとう！ それじゃまた！」

僕は軽くお辞儀をして、藪にめがけて飛び込んでいった・

「で、昨日はちゃんと帰れたか？」

「なんとかね。カイには怒られたけどね」

何気ない感じでタクは続ける。

「でもまあそれでよく今日も出てこれたよな。家の中に閉じ込められてもいいもんだとと思うが……」

僕はその言葉を受けて、自分の首についている首輪を思い出した。

「僕もよく分からぬけど、なんか今朝、この首輪をつけてもらつたんだけど、そしたら普通に出してもらえたよ」

そこでタクが何となく察したようだ。

「何だっけ、じーぴーえす？ つだっけ？」

「ん？ 何それ」

「あー、いや、俺も詳しくないけど、名前だけ聞いたことあるつてやつだよ。まあそんな事よりもだ、昨日は道に迷わず帰れたか？」

「……あー」

「迷つたのかよ……じゃあどうやつて帰つたんだ？」

昨日、タクとスケロクと初めて会つた場所で、タクとスケロクに見つめられながら、タクにそう言われて、昨日の事を思い出す。

「道に迷つてたら、綺麗な雌の猫に会つたんだ。その猫に道を教えて貰つたよ」と、僕が言つた途端に、タクがグイッと僕に迫り寄つた。

「ふうん。どんな猫だつたんだよ？」

僕は少し驚き、タクに気圧されながら、昨日の猫の風貌を言う。

「えーっと、雪みたいな色の毛で、その毛がふわふわしてた。あとすごくいい声だつた」「ほーん。ふーん。ほーん」

タクが壊れたおもちやみたいな声を上げる。

「そりやあ一度見てみたいなあ……なんせ野良してる猫は雌が少ないからねえ……」

そう、タクが無駄にいい顔と声で言つてゐる最中、スケロクが口をはさんだ。

「……その猫、覚えがあるなあ」

その言葉に僕とタクが引き付けられ、スケロクの方を見る。

「じいさんそれマジかよ?」

餌に食らいつくような勢いでタクが言う。

「ふわふわの白い毛並みつて特徴はここらじやあんまりないからな」

僕はそこでまたはてなを浮かべた。

「シロイってなに？」

スケロクは驚きもせず、淡々と言う。

「雪の色のことだよ坊や」

「クロは黙つてろよ！ で？ で？ ジーさん詳しく！」

タクがそんなことはどうでもいいと待ちきれんばかりに急かす。対してスケロクは渋い顔をして続けた。

「……辰野のばあさんの家の猫がそんな感じじやつたような……」

「というと、タクは「うへえ」と言うような表情に顔を作り変えた。

「あー、あの猫ね……あの猫は確かに可愛かつたけどイケすかねえ奴だつたよなあ。何とか俺らを小馬鹿にしてるつて言うのがすぐ分かるぜ……」

タクの渋い顔に僕は疑問を抱く。

「タツノのおばあさんの猫つていうのは……？」

タクは顔を少し緩めて言う。

「あー、まあこの団地の端の方に、辰野つていうばあさんが居たんだよ。辰野のばあさんは俺ら野良にもすごく優しくて、遊びに行つたら食いモンくれるとかで、俺らもよく行つてたなあ」

そこから急に嫌そうな顔になる。

「んで、ばあさんは今までに何匹か猫を一匹ずつ飼つてたみたいでよ、俺が通い始めた時に飼つてた猫が、そのイケすかねえ猫だつたつて訳よ。いつもばあさんに抱えられてたんだけど、俺を見る目が何て言うかまあ……冷たい？ 見下す感じだつたんだよ」

「へえ……今度会いに行つてみようかな……」

僕が何気なくそう言うと、「あー、いや」とタクが残念そうな顔で否定する。

「もうばあさん居ないんだよなあ。なんか引っ越したかなんか知らねえけど、突然いなくなつた、みたいな。んで、その猫もばあさんと一緒にいなくなつたんだよ。まあ家は残つてからよく猫のたまり場みたいにはなつてるけどよ」

「あっ、そうなんだ」

タクは苦い顔をしていたが、一転して無理やり明るそうな顔にすると、

「まあ、今度連れてつてやるよ。今日の所は優先的に案内したいとこあつから、そこに行こうぜ！」

そう笑うタクの言葉に、僕は大きく首を縦に振つた。

僕らは少しの間、まわりをぶらぶらとした。カイに心配をかけないように、『ニジカン』だけ色々回った。何から今までタクとスケロクに任せた。どこに行くだとかはタクに道案内してもらい、僕もタクも時計が分からないのでスケロクが『ヒドケイ』で時間を見ててくれた。向かった先はまず河原、そこではこの地域の澄んだ空気と同じくらい澄んだ水が滞りなく地平線の彼方へ流れている。その川の中にはその流れに逆らって僕の手のひらに収まる大きさの小魚が何匹も何匹も泳いでいる。体がそれらを追つてしまいたくなる、なんと興味をそそられる光景だろう。それだけではなく、誘惑の種は草むらにもあった。実際はあまり味は良くないというが、バッタや蝶々が美味しそうにお尻を振っている。そこの河原で息をするだけでウキウキが止まらない。

他にスケロクがよく行くゴミ捨て場に連れて行つてもらつた、よくスケロクはゴミ捨て場で食べ残しを漁るのだという。スケロクのように年を取つてあまり体を動かせない猫にとってはこういうところは格好の餌場らしい。ゴミを漁るなんて、と思ったが、騙されたと思つて漁つてみると、意外や意外、掘り出し物が湧き水のように溢れて来る。また、今回は居なかつたがたまにネズミが出るという。そのネズミもなかなか美味らしく、ついでに逃げ回るそれを追うのはなかなか楽しいものらしく、想像に容易かつた。

などなど、他にも数か所軽く回つたが、まだ紹介し足りないらしく、とても限られた時間では回りきることが出来なかつた。少し口惜しみながら、また明日以降に紹介してもらうことにした。

そんな時間を過ごして、タクとスケロクは見送りがてら僕の後についてきて、昨日道を間違えた分かれ道に差し掛かつた。そこで僕が言う。

「ここを右に曲がつて、あの白猫に会つたんだ」

僕が振り返つてタクとスケロクの顔を見ると、タクもスケロクも露骨に嫌そうな顔をしていた。タクは恐る恐るという感じに僕に尋ねる。

「おい……お前ここ行つたの？」

僕はキヨトンとして返す。

「え……そ、そうだけど……」

スケロクは鼻をびくびくと動かせて言う。

「お前さん、わしらが昨日お前さんの家の方に変な臭いのするところがあるって言つたのを覚えてるか？」

「あ、うん。僕が帰ろうとしたときに言つてくれたよね」

「そう、その臭いはこの先から臭つてきてる……わしはこの先には行きたくないな……タクも大きく首を縦に振つて主張して言う。

「俺も無理だつて！ 鼻が取れそうだ！ ほんとにこの先に猫なんかいたのかよ！」

予想外のタクとスケロクの反応に言葉を詰まらせた。確かに昨日、ここに猫がいた。僕は彼女をきちんと見たし、その上話までしたのだ。幽霊とか夢だつたとかはあり得ない。

「……いや、昨日は確かにいたんだ。ちょっと確かめてくるよ。じゃあね」

僕は足を踏み出したが、タクがそれを止める。

「やめとけって！じいさんも言つてただろ？熊か何か出るかもしれないって！」

僕はいつの間にか喉に溜まつた唾を飲み込んで、振り返らずタクに言う。

「それだったら尚更ほつておけないよ。僕、行ってくる！タクとスケロクは帰つてて！」

僕はそう言つて走り出した。落ち葉を舞わせつつ、僕は必死でそこを走り抜けた。

走りに走つた。そんなに長い距離ではないはずなのに、とても長く感じた。落ち葉がまるで蛇のように足に絡みつく。やけにこの森の湿度は高く、僕の体温と僕の体の中を蒸し焼きにしているようだた。

程なくして輝く光のようなものが森の奥で見えた。僕は全力でそれらに駆け寄つた。その光は一つ一つが猫の形を作つて木の傍に静かに昨日と同じ配置で佇んでいた。近くまで寄つて僕は足の速度を落とす。

やはりというかなんというか、僕が近づいても、ある一匹を除いて猫たちは僕を見る素振りすら見せない。僕はその中の僕に反応した一匹の猫に近づいた。カゲツは目をぱちくりとして僕の顔を見る。

「……どうしたの、そんなに慌てて」

カゲツの元気そうな顔を見て僕はほつと胸をなでおろした。しかしそんなことよりもと、僕は真剣な顔で彼女に言う。

「他の猫から聞いたんだ。ここには熊が出るんだって。だからここは危険だつて伝えに来たんだ」

僕はそう言つた。しかし彼女は全く表情を変えずに僕を見つめる。

「それ、熊が出るつて証拠はあるの？」

「ここらへんつです」「く臭いらしいんだって。この臭いって熊の匂いかも知れないって言つてた」

顔をゆがめる彼女。少し身をよじり、彼女の体の傍に咲いているあの花々を揺らす。

「……臭いってだけで熊がいるとは限らないわ。誰かここらで熊を見たことがあるの？」

僕は首を横に振る。

「あまりに臭いからって、誰もここに来たがらないみたい」

彼女はフン、と鼻を鳴らして、「臭い……ねえ……」と呟いた。何だか怒つてているようにも見える。

「見てもないのに熊が出るつて言ひふらさないで欲しいわね。ていうか、私、ここにずっといるけど熊とか見たことないわ。ここには私だけしかいない」

そこで僕はピンつと耳を立てた。

「あの猫たちは？」

僕はちらりと振り返つて、背後の猫たちを見る。猫たちは言うまでもなく相変わらずだ。彼女も変わらず不機嫌そうに言う。

「まあ……そうね、彼らもいたわね……でも無反応でしょ？ 居ないも同然よ」

「……」の猫たちって、何というか……何なの？」

疑問を率直に投げかけた。我ながら返答に困る質問かなと思ったが、彼女はだいたい察してくれたようで、まじまじと彼らを見つめながら彼女は答える。

「……そうね……簡単に言えば私の家族よ」

家族と聞いて、確かに色は同じだが、どうも関連性が曖昧というか微妙だなあと感じた。「にしても、何で何も言つてくれないのかなあ？」

彼女はそこで黙り込んだ。「おや？」と僕が尻尾を立てて不思議に思うや否や、おもむろに口を開いた。

「そうね、彼らは痴呆なのよ」

「チホウ？」

彼女はすぐさま僕が理解していないの察すると、

「痴呆って言うのはね、年齢を重ねて脳の機能が……頭の働きが悪くなることよ。正常な判断が出来なくなってしまうわ」

「へえ…………」

なるほど、とまた僕はあの猫たちを見る。痴呆って言うのがあるのか。そこでふと思つたことが口から漏れた。

「君つて本当に物知りだよね」

「そうかしら」

「そうだと思うよ。タクとスケロク……僕の友達も物知りなんだけど、彼らはなんというか、何て言うんだろうな」

僕がうーんと唸つていると、彼女が言う。

「経験則、かしら？」

「え、う、うん。多分それかな」

正直意味が分からなかつたので適当に返事を返すと、彼女は呆れたようにため息をついた。小馬鹿にされたようだ。僕は苦笑いをして言う。

「まあ、でも凄いよね。どこでそんなに勉強したの？」

「……それ、答えないとダメかしら」

少し度が強い声だった。ちよつと僕がびつくりしてたじろぎ会話の間を空けると、彼女は勝手に答えないとダメな空氣だと読み違えたようで、しぶしぶと口を開いた。

「……私、昔飼い猫だったのよ」

「えつ、そうだったの？」

そういつた矢先、そういうえば何となくそれっぽいなど感じた。何というか、彼女の風貌だけ見ればお金持ちの家が飼っている猫の様だ。

「私の元ご主人がよく私に本を読み聞かせたりしてくれていたわ。その甲斐あつてつて感じ」

「え、本の読み聞かせで学んだって、君、人の言葉が分かるの？」

「ええ、まあ……私が小さい頃からずつとそうされてきたから……」

「字も読めるの？」

「まあ……ある程度なら……漢字はあんまり読めないけど……」

「ええっ!! それは凄い!!」

僕なんて字どころかカイの言つている」とすら全く分からぬ。

「僕も勉強すれば読めるようになるかな……」

「まあ……勉強すれば出来るようになるんじゃない? 人の言葉をわざわざ勉強するなんていう猫、聞いたことないけれど……」

と、そんな時にふとある思い付きが浮かんで、何気なく口に出してしまった。

「君に教えて貰えないかな……」

「……何ですって?」

明らかに邪気がこもった声が彼女から聞こえた。

「あ、いや何というか、身の回りに君以外に人の言葉分かる人いなさそっだし、僕だけで勉強するのもどうしたらいいか分かんないし、ちょっと出来たらなあとか……」

焦つた僕は取り繕うようにしどろもどろな言葉の羅列を並べる。しかし彼女はキツと蛇のような目で睨む。何となく今だけ彼女の前身の毛が全て針金に見えた。

「それにはらカイ……僕の飼い主の喋ってる言葉なら理解くらいはしたいし……はは……」
「……と、彼女の怒りがほんの少しだが治まつたか抜けたかは知らないが、何となく一抹のやさしさというのを彼女から感じる。

「……貴方、そんなにご主人が好きなの?」

「え? あ、うん、そりや、そうだよ」

彼女はまたまた溜息を吐いた。そして一瞬目を逸らして考えるような素振りを取る。

「……そうね、だつたらここに来るとき、本かチラシか何かの一部を持つてきなさい。新聞がいいわね。ひらがなだけでも教えてあげるわ」

「え……いいの?」

思いがけぬ言葉に、肝がヒヤツとした。とても冷たい舌で背中を舐められたかのような不思議な恐怖が突然僕を襲つた。

「何よその顔……嫌ならないわ。貴方だけで頑張つてちょうどいい」

「え!! いや、是非お願ひします!! ……えつ、ていうか本当にいいの?」

「くどい。何度も言わせないで」

不機嫌そうな彼女。これ以上とやかく言うのは止めた方がよさそうだ。

「えーと、じゃあ、時間つてどうすればいい?」

「いつでもいいわ。いつもここにいるし」

「毎日殊勝ね」

デンワチヨウという本の一ページを咥えて歩いてきた僕に向かって、彼女はいつものように気の横に体を横にして、あの高貴な花々に囲まれている。ただ、何となくいつもと違うのが分かった。

ここに来るようになつて8回ほど夜を明けた。彼女はいつも一步も変わらずこの場所でこの花々に囲まれて体を横にしている。それも毅然と、まるでのっぺりとした草原の中に佇む一輪の花のように、周りに自分と同じ花がなくとも、風が表皮を冷やしたとしても、気にせずに自分という存在を自分自身が認めて擁立しているような、なんかそういう感じだ。でも、今日は、何となく毛並みが悪いような、また、何か毛立ちとか尻尾の調子とか髪の長さとか……。

彼女はそこで溜息をした。出会った頃はよく溜息をしていたが、ここ暫くは見なかつた。

「じゃあそれ、そこに置いて」

僕は言われるがまま、彼女から少し離れた地面にその紙を置いた。そして彼女はまじまじとそれを眺める。

「これにはひらがなは少ないわね。でも代わりに漢字と数字がいっぱいあるわ。漢字はまだ早いと思うし、ひらがなもら行まで覚えたみたいだから、今日は数字を教えましようか」「あ、うん」

僕は紙に対して正面に回る。彼女と紙と僕が一直線になつて、彼女は新聞から少し距離を取つて、逆さまに新聞を眺めている。これがいつもの配置だ。僕が定位位置に座ると、すぐによくから何番目の文字を見ろだとか、その字はなんというだとか、を教えてくれる。しかし、僕がいつものようにそこに座つて耳を傾けていても、一向に声が聞こえない。

おや? と思い、僕は新聞から顔を上げて彼女を見た。すると、彼女は僕の方や新聞の方を見ておらず、彼女から見て右の方を向いている。

「カゲツ?」

僕が名前を呼ぶと、彼女は顔を僕の方に向ける。

「ああ、ええと、ごめんなさい」

ちよつぴり、ほんのちよつぴり彼女は声を上ずらせて言つて、じつと新聞をあらためて見た。

「顔色悪いけど、調子悪いの?」

「え? ……ああ、そうね。まだお昼食べてないからかしら。ちよつとぼーっとしてしまつたわ」

ふと僕は彼女の見ていた方向を見た。彼女から少し離れた所、そこに一つの枯れた花があつた。きっと彼女を囲んでいる花の一つだろう。その花弁が散つて萎れていた。まだ茎は

元気な色をしているが、全体的に見てみすぼらしい印象を受けた。

「枯れちゃってるね」

僕の言葉に、彼女は耳をピンと立てた。新聞を見ているが明らかに読んでおらず、ただそこを見ているという状態だった。間を空けて彼女は言った。

「……そうね」

彼女はそうは言うが、他に目立った反応はない。というか何もしていない。

「せっかく綺麗な花だったのにね。好きだったの？」

その一言で、彼女が凝視していたものがあの花であるという事が、僕に完全にバレたことを悟ったようで、鼻から大きく息を吸い込んで吐き出し、観念するように言つた。

「ええ、好きよ」

そんな彼女の思わし気な振る舞いが、僕の興味心をくすぐる。

「どういう花なの？」

小さく鼻から息を漏らして彼女は言う。

「彼岸花、と言う名前よ。元々中国——私たちのいるここから海をまたいだ先の所に生えていたといわれる花ね。だいたい秋に咲くけれど、ここは涼しいから早めに咲いちやつたみたいね。あと根から毒がでているわ。それから——」

彼女はいつものように僕に事細かく説明してくれる。しかし、僕は口をはさんだ。

「あー、うん。そうじやなくて、君にとつてどういう花かつて事」

彼女は言葉を止め、また静かになった。それから三つほど呼吸を挟んで言う。

「……私のご主人が好きだった花よ」

何だか、重い一言だった。僕は彼女の飼い主がどうなったかは知らないし、聞いてみたい気持ちも勿論あるが、詮索しないで欲しいという声色だったのと、流石の僕もこれ以上利くのは野暮であると感じた。僕は鼻の中から一つの花を見て言う。

「そ、う、な、ん、だ、いやー、綺麗なお月様の色をして、いるね」

話題を変えようと僕がそう言つた。しかし、何故だか目に見えて彼女の表情が悲しい顔になつた。

「……違うわ。本当は違う色よ」

「えっ」

僕は視線を鼻から彼女に移す。彼女は僕の方を見ず続ける。

「私たち猫の目と、人の目は違うの。私たちは月の色とこの花の色の見分けはつかないけれど、人にとっては全然違う色に見えているらしいわ。月の色は黄、この花は赤よ。猫には赤色が見ることが出来ないの」

「キ……アカ……」

正直彼女が何を言つてゐるのか想像がつかなかつた。猫と人の見え方が違う？ そんな馬鹿な。そう率直に思つた。しかし彼女が嘘を言つとは思えないでの本当の事であろう。

「この花がどうかしたの？」

「え？」

驚いた声を彼女があげる。

「だつておかしいじやないか。確かに好きな花が枯れたら悲しいかもしれないけど、君の落ち込み方はちょっと異常だよ」

虚を突かれた質問を受けたからだろうか、目を丸くして少し黙った。そこから落ち着きを取り戻して何か考え込んでいる。そして、何やら観念したように溜息をついて言う。

「私の昔のご主人がとても好きだったのよ。普通は彼岸花って、みんな不吉だとか言つて嫌うけれど、あの人はそうじやなかつた。単純に真つ赤できれいだからっていう理由でね。それにつられて私も何だか好きになつちゃつたの。赤つてのがどんな色かは知らないけどね」昔を偲ぶように彼女は言つた。そして僕も、何となくボツリと言つう。

「赤か……見てみたいね……」

「ええ……そうね……」

彼女が呟いて沈黙が割り込んだ。暫くそうして、彼女と花をじつと見ていた。

花を見てから数字を学んでまた何度も夜を超えた、僕は重々しい足取りでカゲツの元へ向かう。今日はシンブンシという、びつしりと文字が刻み込まれた紙を持ってきた。……これだけ文字があったら、カタカナも漢字も全部覚えることが出来たのだろうかと、溜息をついた。

ここ数日のカイの行動とか、周りの雰囲気から、何となく察することが出来たし、今朝から、カイが荷造りをしているのを見て確信を持った。二つ夜を越すうちに、いや、もしかしたら月の朝にはもう出立するかもしれない。

帰りたいという気持ちは、ここに来たばかりの頃はまだあったのかもしれないが、今はここに残りたいという想いの方が強い。でもカイから離れたくはない。カイと一緒に個々の全てを持ち帰りたいという我儘も湧いてくる始末だ。

僕がとぼとぼと歩いて、彼女の前に着いた。彼女は静かに僕の行動をじつと見ていて、着くや否や声をかける。

「浮かない顔ね」

「まあね」

いつものように、拾つた紙を彼女より少し離れて置く。

「じゃあ、さつさと始めましょうか」

彼女はいつものように前屈した姿勢で紙を読もうとする。

「ごめんちょっと待つて」

彼女の視線を浴びて、尻尾の先にピリッと何かが走つたが、気にしつつも僕は続ける。

「実は僕、多分明日帰らなきやいけなくなつたんだ」

彼女には驚くような素振りはなかつたものの、悲しげに尻尾を揺らした。

「そう……」

唐突に気まずくなつてしまい、お互に少し黙つてゐる。仕方なく苦笑いを声に出して僕は言う。

「ま、まあ、今日は最後になるんだけど、今日もお願ひしていいかな？ 今日中にどこまでいけそう？」

「そうね……、新しく進むのは無理そうね。ひらがなと文法、それからカタカナのおさらいをしましょう」

「……うん」

自然と僕の耳から力が抜けた。

「……どうしたの」

出先を折られ続けた彼女は、明らかに不満気な声を出す。普段ならそれに怖気づいて慌てるかもしれない僕だが、今日が最後だと思うと、自然と本音が出てきた。

「うん、最後まで人の言葉を学びきれなかつたなあつて言うのもあるけど、ノノから離れるのが寂しいなつて思う」

「そう……」

彼女はそこで区切つた。

「……言葉を学びたかつたら、発音は分からぬだらうけど人の会話に耳を澄ませておきなさい。他には本を読むとか、テレビを見るとかでもいいと思うわ」

「そうだね……」

淡淡と彼女に寂しさを感じつつ、僕は言う。

「……いつか分からぬけど、また今度来た時に教えて貰つていいかな？」

「…………その時に会えたならね」

「えつ……」

唐突に出てきた理解不能な言葉に、思わず声を荒げた。

そんな時だつた。僕の後ろで耳障りのいい音が鳴つた。その音は、落ち葉や枯れ枝などを一斉に踏み潰した音で、猫の足では到底鳴らない音だつた。はつと前身の毛が逆立つ。もしや、熊ではなかろうか。肝から熱が失せるのを感じて後ろを振り向いた。音は歩み寄るように一定のリズムを保ちつつこちらへと近づいてくる。その音の主が後ろの木陰の裏に迫つてきた。僕は緊張を感じつつ、その音の主が現れるのを身構えて待つた。

『お、いたいた』

むしろ熊よりも場違いな、カイがそこにいた。ぎよっと僕は慌てて、カイをまるで敵でも見るかのように凝視する。カイは右手に光を放つ小さな板を持っていて、それを見て言う。

『うん……GPS の履歴だと、毎日ここに通つてゐみたいだけど、こんなところに何かあるのか？ つていうおつ』

カイは少し驚いたような声を上げた。視線の先を追うと、カイはカゲツを捕えていた。

『はーん、お前逢引きしてたのかー。お前を実家に連れてきて正解だつたな』

カイは無邪気にっこりと笑う。突然のカイの出現に僕は驚きを隠せないが、何となくカゲツにカイを紹介しなければと思い立った。

「あ、これが僕の飼い主のカイ、だよ」

カゲツに向き直って僕が言う。しかし、彼女は声を発さない。おや、と思つて彼女を見ると、彼女は身じろぎひとつこそしないが、顔が完全に強張つていた。目に見えて何か緊張している。まるで蛇に睨まれた蛙だ。久しぶりの人との対面に緊張しているのだろうかと思うが、それにしては何だか様子が変だ。そんな僕の憂いなどお構いなしに、カイはカゲツにそっと近づく。

『やあ、いつもクロがお世話になつていてるね』

警戒させないようにカイは気を遣つて笑顔で話す。しかし、カゲツの反応は一切変わらない。

『ごめんねカゲツ。驚かしちゃったかな』

僕は笑顔も作れず、カイとカゲツへの視線を行つたり来たりさせた。カイは気にせず、じつと静かにカゲツを見つめる。僕が氷の上にでも立つているような気持ちでその場に座っていると、突然、カイの表情が変わつた。

『お前……足……』

カイの視線を追う。カイの視線の先はカゲツの右足だった。見ると、いつもと変わらぬ綺麗で柔らかそうな毛並みがそこにはあつた。しかし、何となく少し妙な形をしている。カイはカゲツに対して近づき、手を伸ばした。

『カイッ?』

僕が声を荒げても、カイの手は止まらない。ゆっくりと伸びていくカイの手に、怯えつゝもカゲツは目を閉じてそのままなす術もなく身動きしない。ついにカイの腕はカゲツの両脇を捕える。そして、カゲツの体はいともたやすく持ち上げられた。すると、カイの顔は暗いものになつた。そこで僕はもう一度、カゲツの足を見る。僕は音にならなかつたが驚きの声を出す。

『カゲツ……君、足は……』

彼女の右足は胴から伸び、途中から切れていた。傷口は塞がつてあるものの、断面は毛が生えておらず、黒ずんでいる。彼女は何も言わずに、抵抗せずに体をぶら下げているのみだつた。

そして、僕は他の気配が僕らの周りにいることに気が付いた。その気配の正体は、あの無反応だった猫たちである。猫たちは、僕とカゲツとカイを取り囲むようにして座つて、ただただカイを見つめていた。僕は意識せずに身構えていた。咄嗟にカイの身が危ないと本能が語り掛けたからかもしれない。その猫たちは、ただただじつと、襲う訳でもなくカイを見続けた。

カイは全く気付いていない。僕はカイに知らせようと、カイのズボンの裾を噛み、引っ張った。カイは僕の方を見て言う。

『すまんクロ、ちょっと待つててくれ』

僕は唚然とした。僕を見たならば、必然とこの猫たちも視界に入る筈だ。しかしカイは何も警戒しない。普通、突然猫に囲まれたら驚くに決まっている。そこで僕は察した。カイにはどうやら見えていないようだ。

カイは猫たちを気にせずカゲツを見続けた。そして、カゲツをゆっくりとカイの足元におろして、頭を撫でた。

カイの視線はふと、カゲツのいた、彼岸花に囲まれたところを見た。そこで、カイの目は大きく見開いた。口が開きっぱなしで、カイはそこを見つめている。僕もつられて覗き込んだ。そこには大きな石があった。カゲツと色がかぶっていたせいで、この瞬間僕は初めて気づいた。その石は不思議な形をしている。橢円球の形で穴がいくつも見られる。穴は左右対称に上から大きな穴が二つ、次に小さな穴が二つ、今度は小さな小石のようなものが綺麗に並んでいる。その穴や小石の隙間を見る限り、その大きな石は空洞になつてているようだ。

そこでカゲツは口を開いた。

「……願わくば私の余生の限りここにいたかったけど、これはこれで仕方ないわね……せめて綺麗に供養して頂戴」

彼女は僕ではなく、カイに言つてゐるようだった。そして気付けは、周りの猫たちは跡形もなく足跡もなくどこかに消えていた。

車に全ての荷物が積み込まれた。来た時とは違い、僕はあの箱に詰め込まれずに、車の前に立つカイに抱きかかえられている。カイの父親は既に運転席に既に座つており、カイを待つてゐるようだ。そして他のカイの両親以外の家族や親戚、友人など含め、総勢十名そこそこ集まつていて、何というか、やはり僕ら猫よりも人は大きい生き物なので、こう並ぶと圧巻される雰囲気がある。彼らはカイと口々に長々と話を続けており、時たま僕に話しかけたり頭を撫でたりしてくるが、僕は前に人の会話だけにでも耳を傾けておくようにといわれたのにも関わらず、僕はその場で交わされているすべての言葉を受け流している。

思い返せば、ここに来た頃よりも僕は一回り成長したような気がする。今まで生きてきた時間に比べれば本当に短い間だと思うが、人生の中で一番濃厚な時間だつたかもしれない。人の言葉も覚えたし、一般的な知識とか、車は生き物ではないという事まで覚えた。

僕は尻尾を左右に大きく振り続け、ここでも思い出を偲ぶ。カイの顎を尻尾で撫で続けてしまつていて、少しカイはうつとおしそうに手で防御をしているが、気にせず僕は振り続けた。

僕は徒然なるままにそんなことをし続けていると、ふと家の玄関に人影が現れた。それは

カイの母親で、その胸に何かを抱きかかえて出てきた。僕はその胸に抱きかかえられているものを見て、耳と尻尾を突き立てた。

その胸に抱えられている物体は、雪のように白い毛並みで、羽毛のような柔らかさ風になびいているのから伺えるし、深い海を詰め込んだ宝石のような目をしている、カゲツだった。彼女はどこか居心地が悪そうな顔をしていて、僕を見るや否や、顔をそむける。その不機嫌さは僕との別れを悲しんでいるからなのか、彼女の首に着けられた新品の青い首輪が締め付けているのか不愉快なのは、僕には知る術がないが、僕としては前者が望ましい。

あれから色々なことがあった。警察が来てあの場所を締め切って調べたり、カイは警察から質問攻めにあつていて、そのせいでもた数日帰るのが伸びたり、遺体は辰野ゆかりとう人のものだつたり、遺体の骨に外傷がなかつたのと依然通つていた病院での診察の状況から脳梗塞で即死であつたという可能性が濃厚であたり。それからカイの思い付きでカゲツがこの家の一員になつたり。

カイの母親がカイに近づく。なす術もなく連れてこられたカゲツはばつが悪そうになるが、僕に反応せざるを得ない距離まで迫つてしまつたので、仕方なく少し照れた様子で僕と目を合わせた。僕はそんな彼女に言つた。

「次に会うときは漢字、教えてね」

「……仕方ないわね」

そう一言交わすと、丁度カイたちも話し終えたようだ。カイは車に乗り込む。エンジンが唸り、窓が開いて、また言葉を交わして、車がゆっくりと進みだした。僕とカゲツはお互いに目を合わせ続け、車が動いても方向が変わつても僕たちは目を合わせ続けた。

そしてすべてが風景に溶けて点となつた頃、僕は窓の外を見る。この風景を見るのはまたしばらく後になるのかと思うと寂しさが増すばかりだ。次に来るときはどんな事があるのだろうか。僕はその田舎の暖かさとカイの体温に包まれて、静かに目を閉じた。

ふと思いつくのは、あのかつての主の周りにいた無反応な猫たち。カゲツとあの猫はずつとあの場所で主を守り続けていたのだ。僕はカイを守れるだろうか。そう思いながら僕は眠りの中へ溶けていった。

あとがき

時間なくて色々とカツトしてしまいました。何という急転直下なストーリーなのでしようと反省。特に後半が。

どうも、電子書籍班班長の鮎太です。お前どんだけカツトすんねん、んで〆切過ぎとるやんけど自分にツッコミを入れつつ書き上げました。

今回は猫を主人公にしてみました。自分でも初めての試みです。比喩表現が直線的に使えないのが難しかったですねえ……代わりに猫特有の比喩も出来ましたのでとても楽しかったというのもあります。実は最初はJKを主人公にするつもりだったのですが、靈感少女プロット作成時に何だか猫飼いたくなりましたので猫にしました(適当)

まあ、人間って動物の行動に比べて制限多すぎますので、むしろ都合が良かつたのかもしれません。JKが近所を散歩とか森の奥をほぼ毎日散策とかしないでし。そんなことしてる女子とか電波すぎますしお寿司。あんま自由に少女を行動させているとラノベ的になってしまいそうだし……ラノベは難しいですからねえ……異世界を舞台にすれば話は別ですが、それはそれで描写めんどくさいですし。異世界で車とか電気とか言えないですね。まあ設定で書くことは出来ますがそれはそれで描写がめんどくさいという、でもそこで(以下ループ)

まあ、異世界は先駆者が多くて難しいジャンルだと思います。灰と幻想の彼の地での異世界生活を祝福する物語書くの難しそう。その点、猫目線はあまりみないと思います。僕もと言う訳でこういう路線にしました。はい。

んで、猫の見ている世界に関しては、まあ目の中にある神経の数とか種類か何かサムシングが人間とは違う訳ですよ。んで、丁度猫にとっての月の色が真っ赤なのと大体同じなわけですよ。説明難しいので気になつたらググって調べてください(丸投げあ、あと猫と人間の聴覚の差異に関してはツッコまないでください。もれなく僕が死にます。

最後になりましたが、最後まで読んで頂きありがとうございます。この作品を読んで楽しんで頂けたら幸いです。あと良かったら感想ください。何でもします。あとがきは書くのがとても楽しいのでついつい長文になつてしましました。そろそろ筆を置きたいと思います。本当にありがとうございました!!

PS

アプリなどの制作をしてくれた同期のお二方ほんとにありがとうございます。他にもお手伝いいただいた方に関しましても感謝です。